

「相変わらず賑やかだねえ、ここは」

海から吹き付ける強い風に赤く焼けた髪をなびかせながら男が言った。むき出しの両腕はたくましく、肌は陽光にさらされ続けた赤銅色をしている。一見して海の上に生きる男だとわかる容貌だ。

「エーヴァルト伯爵様のご威光かな」

「私は何もしていないよ」

同じく颯られる髪を鬱陶しそうに抑えながら、ツェザールが呟く。

エーヴァルト領の領都であるサリネイを一望できる丘の上に、伯爵家の居宅はある。突き出した崖の上に位置する屋敷は、そびえる山を背にしている。その上、伯爵家に属する白彫師団の本部と演習場をも抱えたそこは、ある種天然の要塞だ。

「それがいいんだよ。あれやこれやと規制をかけてる港って、案外多いものなんだ。どの国の船でも停泊料と所定の税金さえ取めれば好きに商売ができるのは、我々商人にとっては魅力的なんだよ」

「いちいち細かい規制をかけるのが面倒なだけなんだけどね」
 嘯くツェザールに、男は面白そうに笑って見せた。

「ぜひそのまま面倒くさがっておいでくれ。サリネイに定期機構できる船って、それだけでも他の港でも評価が高くなるんだよ」

「それなら、特別に指名領を払ってもらおうかな」

男の名は、フィレル・ジュリー。エーヴァルト領の沖合いに位置する島国、メルゴに席を置く貿易商だ。

彼とツェザールの付き合いは長い。ツェザールが伯爵の地位を継いだ頃からだから、もう十年近くが立つ計算になる。

「おいおい、伯爵様にはいつもずいぶんおまけしてるんだぜ？ 今日だって飛び切りの品を持ってきたってのに」

フィレルはニヤリと唇を吊り上げた。

「そういつて、また高価いモノを売りつける気だろう」

藪をしかめて見せながら、ツェザールは数歩離れた地面に置かれた木箱を見やった。

大人の腕で簡単に抱えられるほどの小さな木箱は、フィレルの引き連れた部下たちがひどく慎重に運んできたものだった。さして重さもないように見えるそれを三人がかりで運ぶ姿は、一種異様ですらあった。

その、部下たちもここにはいない。ツェザールの部下も一人もいない。フィレルと面会するときは、いつもツェザールは一人きりだ。

「ま、そつちは後のお楽しみということだ」

中身を伺う視線を受け流して、フィレルは港の方向を指した。

「蒸気船、一隻買わない？」

「完成したの？」

ぼんと提示された商品に、ツエザールは驚きの声を上げる。蒸気を動力源とする技術は、十数年前に大陸の南方で開発されたものだ。人力の何十、何百倍もの力を生み出す動力により、大きな車両を連ねて走る鉄道は、すでに普及し始めている。鉄の塊さえ難なく動かす技術は、世界を席卷し始めている。アラガルディアも、ようやく南方から鉄道網が整備され始め、南方の国々との交易手段が一変し始めている。

だがそれは、まだ陸上に限られた話。風と、時には人力による航行が主流の海上にまだその技術が転用された話は聞かない。誰もがやつきになって開発に取り組んでいる最中のはずだ。

「そりゃあ、ジュリー商会の技術力を持つてすれば、ね。簡単に、とはいかなかったけど、実用できる段にはなつたよ」

けれど、フィレルはさらりと肯定してみせた。

「馬力は桁外れに強いから、鉄だつて浮く。それに、呆れるくらいに足も速い。大砲を積んで動けば、最強の軍艦になる」

風向きに左右されず航行できうる上に足が速いとなれば、海戦にとってこれ以上の条件はない。その上、鉄で装甲を固

めることが可能であれば、不沈の要塞にも等しい。

「いいよ。うちに海軍はないから」

ツエザールは嘯いた。

確かに、ツエザールの指揮下にある白雕師団は、陸上の戦闘にこそ特化した部隊だ。否、白雕師団だけではない。アラガルディアの国軍全体を見渡しても、海上の戦闘に向けた部隊はひとつとしてない。

国土の東方を生みに接した国としては一種不思議なようではあったが、それは、これまでの主要な戦闘が陸上のものに限られていたせいだ。そして、もっと切実な理由として、カリアティドとの度重なる戦争で疲弊した国家に、侵略の対象となる可能性が比較的低い海側への防衛には、人も資金も費やす余裕がないためでもあった。

「表向きは、だろ」

けれど、フィレルは笑みを消さない。

ツエザールも、つられたように不敵な笑みを返した。

表向き、エーヴァルト伯の所有する部隊は、白雕師団のみだ。けれどその実、彼が海戦を想定した独自の部隊を組織していることをフィレルは知っている。否、知らないはずはない。ツエザールが私的に、そして密かに揃えている海軍用の軍備の一切を手配したのは、他ならぬこの男なのだ。ジュリー商会の裏の顔は、世界を相手にした武器商だった。

「まだ早い。というより、早すぎる」